

記 録 と 記 憶

下京区 M

先日、自分の記憶が曖昧であることを痛感した。栄養指導を受けていた時のことである。「一週間の食事内容」がなかなか思い出せない。昨日、一昨日くらいまではすらすらと答えられるのだが、一週間分となると何を食べたかが思い出せない。しかし、おおよそ分かる範囲で栄養指導はできるとのことだったので安心した。一年前に食べたカニ料理は、今でも鮮明に思い出すことができるのに、一週間分のメニューは思い出せない。

他にも、記憶にまつわる思い出がある。私は大学に入るまで、犬が苦手であった。他の生き物は大丈夫なのだが、どうしても犬だけがダメだったのだ。何が原因なのかを考えたら、小学生の頃に、とてつもなく大きな犬に飛び掛られた記憶がある。そのときの恐怖を覚えているらしい。その犬はレトリバーという犬種であった。大学に入ってからレトリバーに出会う機会があったのだが、記憶にあるほどの大きさではなかった。それ以来、犬に対する苦手意識はなくなった。

「記録より記憶」とは、野球の王選手と長嶋選手（現在ならイチロー選手と新庄選手であろうか）を比べて言った言葉である。どちらも名選手であるが、何が違うのであろうか。私は新庄選手の活躍する場面を見たことが無いので、名選手である様子が思い浮かばない。しかし、イチロー選手の記録はすぐにでも確認することができる。記録があれば活躍するところは見ていなくても、何をしてきたか評価ができる。

記録とは、誰もが何時でも平等に評価できるものである。記録には喜怒哀楽といった感情は必要なく、客観的に評価される必要がある。また、客観的に評価される以上、改ざんや誇張は大きな問題となる。

記録は、そのままでは紙に書いた記号の羅列にすぎない。記録は、それを解析や分析することによって、適切な評価がされたとき、はじめて研究業績や調査報告などとして意味が生じるのではないだろうか。

それに対して、記憶とは個人の内に秘めたるものである。同じ体験をしても記憶されるかどうかは、それぞれの喜怒哀楽に左右される。私の食事や犬の例を持ち出すまでも無く、喜怒哀楽の感情に伴った出来事は強く記憶に残る。記憶における多少の誇張は問題にならないだろう。むしろ喜怒哀楽によって現実よりも誇張されて記憶されるのだろう。

私の場合、一週間の食事内容を記憶することは難しい。小さなことであるが記録することで記憶を補完できればよいと思う。記録したものは、そのままにせず、上手に評価して今後に役立てて行きたいと思う。